

八丈町末吉洞輪沢における待遇場面形成の要因

沖 裕 子

1. はじめに

待遇表現を、言語行動という視点からながめてみると、ある待遇表現形式が選択される際には、何らかの選択要因(条件)がそこに働いてなされると考えることができる。さて、ふつう、「場面」は、言語選択の際に影響を与える条件のひとつであると考えられているが、「場面」はいかに形成され、形成された「場面」はどのように言語選択の際の要因として働くのかといった点は、必ずしも実証的にその全容が明らかにされているわけではない。

本論文では、八丈町末吉洞輪沢集落の待遇表現行動における「場面」の形成について、その要因を全数調査の中から帰納的に探してみたい。なお、「場面」の中でも、言語選択に強く影響すると考えられてきた「対人場面」——話しかける相手が要因となって形成される場面——について考察対象とすることにしたい。

2. 目的と方法——「場面」の形成過程における仮説を通して——

「場面」についての概念規定は、諸説存在するが、ここでは、「主体に認識された外在的環境」というように考えておきたい。^(注1)

対人場面とは、話しかける相手が要因となって形成される場面であるから、したがって、これもまた、話し手自身に認識されたところのものということができる。その形成には、まず、話し手が「自分自身の位置」を認識し、「相手の位置」を認識して、「自分と相手との距離——対人距離——」をわかまえるという過程を考えることができよう。

対人場面というのは、ひとりひとりの心の中に存在する心理的なものであるが、ひとりひとりが想起する対人場面に、ある程度社会的な共通性があるということを考えれば、それを形成するにあずかる何らかの要因というものも共通項としてとり出せるはずである。

ある属性をもった話し手のグループについては、「相手」の何らかの属性・客観的条件を認めて、相手と自分との間をへだてる距離をわかまえると考えられる。そこで、要因は、「相手」および「話し手」の属性・客観的条件の中に存在しているとみることができ。場面を形成する要因として「相手」の属性・客観

的条件を引き出そうとする時には、対人距離が一定であるとえられる場面を整えてから、「話し手」の属性別にそれを観察することが必要になる。

小論では、対人場面を巨視的・段階的に整えたところで、「相手」のどのような属性がどのような場面形成の要因となるかを帰納的に考察していきたい。話し手としては、八丈町末吉洞輪沢集落の人々を対象とし、まずその全体をながめてから、話者の属性において傾向的な差があらわれた性別によってグルーピングし、分析していくという方向をとる。

では、対人場面を一定に整えるということは、具体的にはどのような調査方法によったらよいと考えられようか。

まず、話し手が、「対人距離をわかまえる」ということを考えてみたい。ふつう、これは、「相手に対する待遇のしかたを意識する」というように置きかえてよいように思われる。そこで、話者には、相手を待遇するときのしかたの意識を尋ね、それを一定にするよう工夫すればよいということになる。

では、相手に対する待遇意識を尋ねるためには、どのようなものに託して質問をしたらよいといえようか。

今回の調査では、話し手が、「いかにていねいに(あるいはぞんざいに)話そうとしているか」という意識を尺度に用いることにした。これは、「何と話すか」という言語の内容を問うものではなく、「どのように話そうとしているか」という話し手の意識を問うものである点が肝要で、それだからこそ、話者の待遇の意識を測る尺度となるものである。方法的に改良の余地は残すとしても、対人場面を巨視的・段階的にとらえて考察しようとする際には、必要条件を満たしているといえるだろう。

調査票(A・B)は次のように作成した。

- (A) (質問順)
○島のことは、自分と同じ調子で話す人。
〔段階dとする。〕
○自分より目下にあたる人で、島のことは気軽にぞんざいに話す人。

〔家族だったら段階fに、それ以外は段階eにする。〕

○島のことばで、段階dの人よりていねいに崇めて話す人。

〔段階cとする。〕

○島のことばで、段階cよりもさらにていねいに崇めて話す人。

〔段階bとする。〕

○島のことば、標準語ということなしに、自分が一番ていねいに話す人。

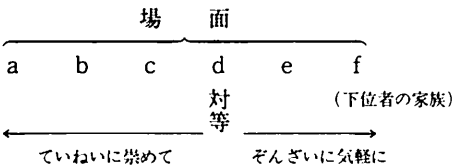
〔段階aとする。〕

(B)

このように、aからfまでに該当する人物（自分がそのような意識で待遇していると思われる人物）を、差し支えなければという条件つきで、具体的にあげてもら。そして、あげられた相手の次のような属性を問う。

- (1) 年齢
- (2) 職業
- (3) 出身地（末吉の人か否か）
- (4) 家族か家族外か

この調査票では、aからfまでは次のように並ぶ。
a・b・c・d・e・fは、それぞれ対人場面であり、こうして得られた対人場面を本論の分析対象とする。



なお、話者がこの中で、ある待遇段階を持っていないか、あるいは持っていて、現在の自分の生活の中にそのような対象がいなければ、その場面は空欄になる。

3. 調査の概要と調査地域・対象者

調査は、1978年6月29日から7月18日にかけて筆者一人で行なった面接調査である。

調査対象者は、日本語を母語としない外国生まれ(韓国)の3名を除いた、八丈町末吉洞輪沢集落の12歳以上(中学生以上)の在住者全員で、男44人、女44人の計88人である。そのうち調査しえた人数は、男28人、女32人、計60人で、達成率は約7割であった。

八丈町は、人口約1万人強(1978年1月1日現在)の町である。島外(町外)との交通は船と飛行機に頼っており、港や飛行場の存在する三根・大賀郷が「坂下」と呼ばれ、行政的にも文化的にも町の中心となっている。

坂下に対して坂上と呼ばれる^{カシヲ}樫立・^{チノゾウ}中之郷・^{スズキ}末吉の三地区が三原山を囲んであり、末吉は、三原山をはさんで大賀郷とは反対側のふもとに位置する。交通的には、三根・大賀郷を出発するバス路線の最終地点にあたっている。末吉から大賀郷までのみちのりは、距離にして約12キロ、バスにして約40分、隣りあった中之郷とも約6キロほどをへだてている。人口は約750人である。

洞輪沢は、末吉を構成する7つの集落のうちの一つで、7集落の規模は大差なく、「末吉」として一体感を持っている。洞輪沢は、末吉の中心から約1キロほど下った漁港をとり囲んで位置している。

調査対象者のプロフィールを紹介する。

調査対象者と既調査者の年齢別人数は次のようである。

(表1) 調査対象者と既調査者(人数)

	男(既調査者)	女(既調査者)
12~29歳	14(11)	12(9)
30~49歳	14(7)	13(10)
50歳~	16(10)	19(13)

父親は6割が、母親は約7割が末吉の出身であるが、本人自身の在外歴をみるとこれら18歳以上の人で、末吉以外どこにも移り住んだことのない人というのは、9人(15.0%)である。あとの人々は、何らかの期間、島外、あるいは他村での生活を経験している。八丈町総務課(1978.1)の資料によれば、昭和10年頃までの八丈島では、過剰人口が本土・小笠原・南洋諸島など広く島外へ移住し、その後昭和20~25年に人口の3分の1におよぶ大量の引揚者を迎えたとあるが、今回の調査でも、洞輪沢在住の40歳以上の者のうち、期間は別として、約半数がこの、島外生活経験者であった。いずれにしても、これら島外生活経験者が多いことは、それだけで、生え抜きからなる言語環境とは異なるものを作りあげていることになる。

職業は、漁業関係者が多いが、かたわら農業も営む世帯が多い。民宿経営(2人)、喫茶店経営(2)といった職種につく人、そのほか、タクシー運転士(3)、保母(1)等、他地区に職場を持つ人々も若干いる。

同居の実態はほとんどが一代、あるいは二代で、三世代が同居している家族は2家族のみである。

学歴は、尋常高等小学校、新制中学卒業者がほとんどで(在学中・NAを除くと7割弱)、次いで、旧制中学・新制高等学校卒業者がしめる(同、2割強)。

島に何らの縁故も持たず、婚姻によって洞輪沢在住者となった人々がいる（いずれも女性、30代3人、20代3人）。これら6人の人々と、完全な調査を行ないえなかった2人を除いて、以後集計を試みることにしたい。

4. 調査結果

調査結果は、表2に示した通りになった。(p.94.95)

表2は、この調査によって得られた、場面aからfに該当する具体的な人物名を記載したものである。具体的に、名前をもってあげられたケースについては、ここでは具体名を無視して「N」で統一して表記した。

年齢については、のちに記し、性についての情報は、ここでははぶいた。

5. 考察

「相手」のどのような属性が対人場面の高低を形成する要因となるのかを探るために、次の3点に着目しようと思う。その3点とは、《地位》《未知》《年齢》である。これらが場面形成の要因としてどのように関与しているか、また、場面形成に働く要因の強さというものがあるとしたら、その優先順はどのようであるかについて、この資料から分析を加えていきたい。

5. 1 《地位》と《未知》

《地位》と《未知》という要因が場面の形成にどのように関係するかをみるために表1の資料から、図1（場面別にみた人物の出現率）をまとめてみた。表1にみられるところから、次の(i)から(iii)の3種類について数をかぞえ、場面別に、あげられた割合を図化したものである。

(i)「役職者名」であげられた人

(ii) 見ず知らずの人

(iii) 名前であげられた人

(i)は、「役場の人」「郵便局長」「先生」「上司」「子供の担任」「担任の先生」「役職者」「警察の人」「組合長」「タクシーの客」「店の客」「民宿の客」「上司の奥さん」「社長」「組合長の奥さん」「校長先生」「N先生」を指している。「N先生」は、末吉小学校の校長先生で洞輪沢に住んでいる方であるが、「先生」の側面が重視されているとみてこちらに入れた。

(ii)は、観光客など、島外からの来訪者を指すことがほとんどで、その例として調査者である筆者があげられた場合もある。

(iii)は、名前をもって答えられた場合で、日常何らか

の接触がある人々であるといえよう。「年上の人」「年寄り」「目上の人」「姑」は、ここに含めた。

なお、一場面に複数の人が答えられているところは、並存のまま延べ数にして集計してある。

さて、図1のグラフをみると、次のようなことが観察される。

①「役職者」は、場面a・bに多くあらわれる。

②「見ず知らずの人」は、場面aにあらわれるのがほとんどである。

③「名前」は、場面aにはたいへん少なく、場面bからcと増え、場面d・e・fでは、みな、「名前」であげられている。

また、図1を場面ごとにみれば、次のようなことがわかる。

④場面aには、「役職者」と「見ず知らずの人」が半々にあらわれる。

⑤場面bでは、「役職者」および「名前」がそれぞれ4対6の割合であらわれる。

⑥場面cは、「名前」がほとんどを占める。

⑦場面d・e・fは「名前」が占める。

以上の観察から場面を形成する要因とその強さを見出すために、これまで、(i)「役職者」、(ii)「見ず知らずの人」、(iii)「名前」というようにまとめてきたものの内容を考えてみたい。

これら(i)(ii)(iii)の中にはいくつかの要素がひそんでいられると思われるが、中でも次のような共通項を引き出すことができよう。

まず、「役職者」としてまとめた人々に対しては、立場(position)という点からみれば、仮に《地位的な上位者》という要素を引き出すことができるかと思う。ここで単に地位としているが、これはいわゆる「業績的地位」^(註3)を指している。

「見ず知らずの人」には、その人との面識のなさ《未知である》という要素が抽出できよう。たんなる面識のなさだけではなく、島以外からやってきた《よそのもの》という点も考慮されているかと思う。単純に未知者がよそ者であるとは限らないわけであるが、洞輪沢のような集落では、末吉というむら全体が顔見知りで親族関係も多く、面識がない、ということと、よそ者であるとみなす意識とはおそらく密接な関係があるであろうと思われる。そこで、《よそのもの》(outgroupness)という意味あいも含めながら、今は、《未知である》ことを要素としてたてておきたいと思う。

「名前」であげられた人々には、《面識がある》、あるいは、《身うちである》という要素が抽出できる。

ただし、高い場面の中で「名前」であげられた人のうちいくらかには、《地位的な上位》を意識されながらも、日頃の交際や親族関係などからその「名前」があげられたケースも含まれてくるだろう。「役職者」名であげられることと「名前」であげられることとの間には区別が働いているであろうが、その答え方には偶然的な要素も支配するからである。

このように考えてくると、「役職者」「見ず知らずの人」「名前」は、《地位》《未知》という点から次のようにとらえることができよう。《地位+》は地位的な上位者、《地位-》は地位的な下位者、あるいは同等、《未知+》は面識がない、あるいはよそ者、《未知-》は、面識がある、あるいは身うち、というわけである。

	地位	未知
(イ)「役職者」	+	±
(ロ)「見ず知らずの人」	±	+
(ハ)「名前」	±	-

「役職者」でまとめた中には、面識のある人とない人とが含まれている。「役場の人」「タクシーの客」「民宿の客」などは、面識のない人々であり、「上司」「郵便局長」などはもちろん面識がある。ここであげられた「郵便局長」は末吉出身者なので「身うち」という要素からみたとり扱いも重ねることができが、「子供の担任」というような面識のある人で末吉在任者であっても、島外（あるいは末吉以外の）出身者であった場合、はたして《身うち》意識を持っているかという点では、単純に《未地-》とできないこともある。今回の調査ではそうしたケースは少数例であったが、今後はやはり、《面識のあるなし》と、《身うち・よそもの》とは別の要素として立てることが必要となるであろう。

「見ず知らずの人」の中には、《地位》に関しては、様々な意識のされ方をする人が含まれているだろうとみて、±とした。

さて、以上のように、場面形成に関与すると思われる要素を抽出してきたわけだが、ここで、先の「役職者」「見ず知らずの人」「名前」の場面別のあらわれに立ち戻ってみることにする。観察される結果は前述の①から⑦までのようであった。

それによると、「見ず知らずの人」は、場面 a のみにあらわれて、b 以下では消えている。また、場面 a においては、「見ず知らずの人」は高率であらわれている。調査時、b から f までを「島ことばで」話す人と

したところから、そうした制限を加えなかった a に、島外者としての「見ず知らずの人」があらわれた、ということもできよう。しかしながら、場面 a に限ってみたときにも、そのあらわれはかなり高率であるので、やはり、高い場面を形成するものであるといえよう。

「役職者」をみると、場面 a のほか、場面 b にも高率であらわれる。よってまたこれも、高い場面を形成するものであるといえよう。

「名前」は、場面 b からあらわれはじめ、c 以下の場面のほとんどを占めている。したがって、「名前」の共通項である《未知-》、《面識がある、身うちである》ことは、それだけではそれほど高い場面を作るとはいえないことがわかる。また、場面 c といったやや高い場面を形成するとともに、対等場面、下位場面もなすことから、「名前」であげられた人々の中には、《未知-》のほかにこれらの場面の段階をそれぞれに形成する、別の要因を秘めていることが予想できるのである。

さて、いま抽出した要素を、場面形成に関与する要因という形でみれば、次のようにいえるかと思う。

「見ず知らずの人」に共通した要素は《未知+》であり、「役職者」でまとめた人に共通した要素は《地位+》であり、「名前」に共通した要素は《未知-》であった。そこで、場面形成におけるこれらの要因の働きと、その強さは、図 1 でのあらわれ方に重ねて考えることができる。

さてまた、「見ず知らずの人」「役職者」「名前」を、未知、地位、という 2 点からみた場合には、要素の組み合わせによって次のような 4 つのタイプが抽象できる。

	地位	未知
タイプ 1	+	+
タイプ 2	-	+
タイプ 3	+	-
タイプ 4	-	-

タイプ 1 は、面識がなく、しかも地位的にも上位者であると認識される。タイプ 2 は、面識はないが、地位的には特には高いと認識されない。タイプ 3 は、面識があり、しかも地位的には上位者であると認識される。タイプ 4 は、面識があり、地位的な高さはそれほど考慮されない。

これら、要因の組み合わせによって高い場面を形成するにあずかる強さの順序づけをすれば、タイプ 1——タイプ 2・タイプ 3——タイプ 4 というように

なる。

5. 2 《年齢》と《地位》

次に、《年齢》という要因がどの程度に、また、どのように場面形成に関与しているかを考察していきたい。

考察する際は、話者に認識された年齢を対象としなければならないので、たんなる年齢の高低は問題にならず、年齢差（設定された対人の年齢－話者の年齢）を扱っていかなければならない。そこで、まず年齢差を各話者、各場面ごとにまとめた。それから次のような観点で集計を施したのが表3である。年齢差がプラスの値の場合（すなわち、話者より年上の人を意識された場合）、マイナスの場合（すなわち、話者より年下の人を意識された場合）、ゼロの場合（すなわち、話者と同年齢の人が設定された場合）、そして、情報なし、に分けて場面ごとに集計したものである。「情報なし」には、「見ず知らずの人」、それから「役職者」の中の、「役場の人」「民宿の客」など、年齢を答える必要がない場合（need not answer）と、少数例の調査不能、調査もれが含まれている。

図2は、年齢の情報があるものについて、各場面ごとの平均値を求めたものである。何十代である、というように答えられたものは、たとえば60代なら65歳、50代なら55歳というように換算した。図2の数値は絶対的なものではなく、傾向的にとらえるべき性質のものであることをおことわりしておく。

さて、図2のグラフは、場面aから場面fまでを横軸に、年齢差を縦軸にとって場面ごとの年齢差の平均値を線で結んだものである。そこにみるように、グラフは、場面bで山ができる線になる。これは何を物語るものであろうか。

図1のグラフに立ち返ると、場面aで年齢の情報が必要なのは、ごくわずかあらわれる「名前」と、5割を占める「役職者」のうちの何人かであることがわかる。それに対して、場面bで年齢の情報が必要なのは、6割近くの「名前」の人と、3割強あらわれる「役職者」のうちの何人かである。そこで、場面aでの年齢差の平均値は、「役職者」、つまり《地位＋・未知－》のものを代表し、場面bでのそれは、「名前」、つまり《地位±・未知－》のものを代表していると考えられる。そこで、bで山形のグラフを作るといことはより高い場面を形成するためには、年齢差が大であるということよりは《地位＋》という方が強い要因であることがわかる。

また、場面b以下は、対等場面で年齢差がゼロになるようなきれいな減少線を描いている。そこで、身うちであって地位は考慮の対象から外された時、年齢的に相手の方が年上である、すなわち《年齢＋》という要因が、高い場面を形成するにあずかるということがいえよう。

また、fは、家族の中の下位者があげられた場合であった。この年齢差のグラフをみる限り、同じ下位者のeより、fの方がさらに年齢差の平均値が低くなっている。そこで、家族集団である身うち性という要因もさることながら、やはり「年齢の低さ」も、下位場面fの特徴のひとつとってよいであろう。ただ、「家族」という、より強い身うち性と、年齢差という要因の優先順位を求めるためには、家族の中で年齢的には上位者である人々の位置づけがどうなされているかという調査に待たなければならない。

5. 3 男女による差異

話者の性的な属性によって、使用する待遇表現に差異の認められることは多い。それでは、待遇的な場面を形成する要因についてはどうであるかを調べるのが、今から行なう考察の目的である。

調査結果は、図3・図4に示した。

図3は、「役職者」「見ず知らずの人」「名前」の各場面別出現率を、男女ごとにまとめたものである。場面bからfまでは、男女でさほど差はみられない。異なりがみられるのは、場面aでの「役職者」と「見ず知らずの人」の出現比である。男性は、その比が約6対3であるのに対して、女性は4対5であり、男性の方が「役職者」をあげる傾向にあり、女性は「見ず知らずの人」をあげる傾向にある。この現象からみるのに、前節での分析に準じて考察すれば、男性の方は《地位＋》の方がやや強い要因となり、女性の方は《未知＋》がやや強い要因となる傾向にあるということであろう。

なお、場面aにあげられた「役職者」の内訳をみると、男性では、場面aにあげられた18人のうち、仕事の関係の「上司」あるいは「客」という性格の人物をあげた人が8人を占める。それに対して女性では、そうした人物はあげられていない。場面bで、女性が4人中1人、仕事関係の上司をあげているのみである。この時、男性は5人中2人。

「見ず知らずの人」という人をここで考えてみると、これだけが《未知＋》という要素をもつことからわかるように、自分の日常生活の中にある程度恒常的に

存在する、定まった場面の高低とははずれたところにあるものである。そこで、日常生活の中に a から f に設定したような段階性を持つ場面が存在しないと、「見ず知らずの人」が設定されやすくなるということがあるのかもしれない。男性は「職場」という集団の成員であることが多く、そこで上位にある人物が、高い場面を保持させ、また場面として形成される原因となりやすいのに対して、「職場」を持たない人にとっては、そうした場面そのものが持ちにくいわけである。そこで、a のような高い場面意識を持たれるべき人が日常生活で得にくいところに「見ず知らずの人」が流れ込んだという側面があるのではないだろうか。そう考えていくと、要因の働き方との真の相関関係は、「男」「女」という性的属性にあるのではなく、「職場生活者」という社会的属性にあることも推察されるのである。

図4に移ろう。

年齢差の平均値のグラフでは、男性では場面 b を頂点とする山形になるのに対して、女性では場面 c が山形の頂点となるグラフになっていることがわかる。つまり、男性においては、場面 b と場面 c の高さの違いを形成する要因が年齢差の高低にあるのに対して、女性では、場面 b と場面 c の差は年齢差には起因しないということが出来る。ちなみに、個別的にみた場合に、場面 b・c での年齢差の平均の大小が逆転している人（場面 c より場面 b での人物の年齢が低い人）は、男性15人中4人、女性では11人中6人であった。年齢順に並んだのは、男性15人中8人、女性11人中2人。残りは不明。

では、女性の場合、何が場面 b と場面 c の高さを分ける要因となっているのであろうか。先に、「名前」であげられた人々の中に、地位的な上位を考慮されている場合が含まれるだろうということを述べた。女性の場面 b において「名前」であげられた人の属性を調べてみると、6人中5人が、出張所長、組合長、婦人会会長、教師であり末吉の旧家の跡とり、という人々であることがわかる。（男性は9人中の5人である。）つまり、女性の場面 b で「名前」であげられた人たちは、《地位+》という要因を強くもって、それが《年齢+》という要因より優先されて b を形づくるに至っているとみることができよう。男性では、《地位+》という要因は、より高い a という場面を形成するのに働いたこと大であり、その意味で、男性の方が、地位的な上位とは、より高い場面を作る要因であるといえよう。言いかえれば強い要因である。それに対し

て女性は、未知、地位的上位、年齢という順に要因の強さが働く。言いかえれば未知という要因に比較して、地位的な上位性は相対的に弱くなっているといえよう。

以上、いずれにしても、男女比較したこれらの結果は、傾向的な相違といえる。

6. 結論

以上考察してきたところから結論を要約する。

洞輪沢集落において、待遇的対人場面を形成する要因については次のようにまとめることができる。

この調査からは、少なくとも《未知》《地位》《年齢》という要因が対人場面を形成するのに関与していることがわかった。高い場面を形成する、要因の優先順位は、面識がなくよそ者であること、また業績的地位が高いことが先行し、身うちであり年齢的に上位者であることがそれに次いだ。

男性では、地位的上位という要因が女性よりやや強く利く傾向にあり、女性は、地位的上位より、面識のなさ、よそものであるという認識が、高い場面を形成するためにより強く働く要因となっていることがわかった。が、これらの要因の利き方の強さには、男女という性的属性より、むしろ「職場」という集団への所属という点に関係しているのではないか、一考の余地がある。いずれにしても、これらは傾向的な差異である。

7. おわりに

場面に関する理論的な研究は、先学の手によって種種成されてきたが、それを実証的に探究した研究は隆盛をみているといえなかった。

また、場面の構成要素という観点での研究は多くみられたが、ある要因によって場面は形成される、という視点を明確に打ち出した論文はこれまでになかった。小 でとったこうした考え方は、言語行動という視点に立って待遇表現を考えた結果である。

なお、要因の優先順序という考え方については、外的条件の優先の体系が存在すると指摘した南(1974)^(註5)に啓蒙された。南の指摘に先だつては、Martin(1964)^(註6)の観察による研究がある。

場面を形成する要因は、ここに考察してきたような、会話を交わす相手の内にひそむものばかりではない。もっと多様な要因から形成されていくはずであるし、また、「相手」に認められる場面形成の要因もこればかりではなからう。ただ少なくとも洞輪沢というところの地域性とそこの言語体系をもった生活では、上記

の要因は骨太なものとして場面形成に作用している、ということがいえるばかりである。今後は、理論的にも場面形成の要因についての考察を整えていくとともに、変数とみられる地域社会と言語体系それぞれの違いによってこの要因がどんな変異を示すか、さらに実証的な考察を行なっていきたい。

なお、小論でとった調査方法による場面資料を使った研究に、拙稿「共通語と方言の接触——共通語使用の価値について——」（『長野県ことばの会会誌』1）がある。こうした場面研究は、次の段階では言語選択の問題と密接に結びついていく、と考えている。その意味で、一見言語とは切り離されているかのようにみえる場面そのものの研究をないがしろにすることはできない。（1980、6）

（注1） 時枝誠記（1941）『国語学原論』では、「場面は又場所を満たす事物情景と相通ずるものであるが、場面は、同時に、これら事物情景に志向する主體の態度、気分、感情をも含むものである。（p. 43）」と説かれ、主体をとりまいて存在する具体的な環境物と、主体の心理にとらえられて構成された心象によるものの、両者を含みこんでいる。時枝以後の場面研究においても、これらははっきりとは区別されずに考えられていることが多いが、私は、「場面」は、単なる存在物ではなく、あくまでも主体に認識された構成物であると考えたい。

（注2） 藤原与一（1956）「方言における敬語」『解釈と鑑賞』 p. 50の、「方言の敬語法を大観するのに……その待遇のしかたは……要するに、“もの言い

をていねいにする”ということである。方言敬語、あるいは方言敬語法の生活は、「ていねい」意識のはたらく生活である」という指摘を参照させていた。

（注3） 塩原勉他『社会学の基礎知識』 p. 23参照。

（注4） 家格が強く影響を及ぼす地域があることが三石泰子（1977）「待遇表現としての文の地理的分布——長野県飯山市・新潟県新井地方の場合——」『国語学109』 p. 78に報告されているが、あげられた対人を見ると、少なくとも現在の洞輪沢ではそうしたものは強力な要因としては働いていないようである。

（注5） 南不二男（1974）「敬語研究の観点」『敬語講座10』 p. 29

（注6） S. E. Martin（1964）“Speech Levels in Japan and Korea” Language in Culture and Society, D. Hymes (ed.)

（注7） この場面調査の方法は、東京都立大学大島ゼミにおいて、特に加藤和夫氏との共同討議によって生まれたものが母体となっている。大島一郎他『八丈島方言の研究』（刊行予定）を参照されたい。

（付記）

小論では、第28回方言研究会で発表し、修士論文でまとめたところの一部を扱った。このテーマについては、昭和55年度都立大國語国文学会総会、第5回長野県ことばの会において口頭発表をし、それをもとに書き改めたものである。参会者の皆様には有益な御意見を多く賜りました。記して感謝申し上げます。

表3 場面による年齢差（本文p.92）

	場 面										人数		
	a		b		c		d		e			f	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		男	女
+	6	4	10	7	22	20	5	6	0	1	0	0	
-	2	0	2	1	0	1	9	8	13	7	15	20	
0	0	0	0	0	0	0	11	9	0	0	0	0	
情報なし	20	26	3	3	2	3	1	2	1	0	3	3	
計	28	30	15	11	24	24	26	25	14	8	18	23	
	58		26		48		51		22		41		

表2の(1) 洞輪沢における対人場面 (本文p.90)

話者番号	年齢	場 面					
		a	b	c	d	e	f
M-1	73	郵便局長			N	N	子供
M-2	70	役所の人		年寄り	N		子供
M-3	68			N	N	N	
M-4	67	組合長	見ず知らずの人	N	N		弟
M-5	64	見ず知らずの人	教員・役場の務め人	N	友人		子供
M-6	61	見ず知らずの人		N	隣人		子供
M-7	61	見ず知らずの人	郵便局長	N	N	N	子供
M-8	52	見ず知らずの人	N	N	N		子供
M-9	51	N		N	N		弟
M-10	51	見ず知らずの人	N	N	N		子供
M-11	46	子供の担任 民宿の客	N	N	N	N	子供
M-12	46	N 先生	N	N	N	N	子供
M-13	41	タクシーの客 上	N	N	N	N	子供
M-14	39	タクシーの客		N	N		子供
M-16	33	上 司	N	N	N		子供
M-17	30	店の客	姑	N	N	N	
M-18	28	町役場の人	N	N	N	N	
M-19	28	見ず知らずの人	N	N	N	N	
M-20	28	組合長 見ず知らずの人		N	N	N	
M-21	23	上 司	上司の奥さん	N	N		弟
M-22	18	見ず知らずの人 警察の人		N	N	近所の子供	
M-23	18	店の客	社長	N	N		弟
M-24	16	担任の先生			N	N	
M-25	15	担任の先生		N	N	N	
M-26	15	見ず知らずの人 年上の人	担任の先生	N	N	N	弟
M-28	14	見ず知らずの人		先生	N		弟

表2の(2) 洞輪沢における対人場面

話者番号	年齢	場 面					
		a	b	c	d	e	f
F-1	78	役 場 の 人		N	N		孫
F-2	76	見ず知らずの人		目 上 の 人	嫁 の 母		孫
F-3	73	見ず知らずの人			N		孫
F-4	66	N		N	N		子 供
F-5	65	見ず知らずの人	N	N	N		子 供
F-6	63	見ず知らずの人		N	N		子 供
F-7	62	見ず知らずの人		N	N		子 供
F-8	62	N 先 生		N	N		子 供
F-9	62	見ず知らずの人		N	N		子 供
F-10	61	見ず知らずの人	N	N	N	N	妹
F-11	60	見ず知らずの人 N		N	N	N	子 供
F-12	56	目 上 の 人			同 輩		子 供
F-13	56	見ず知らずの人	組合長の奥さん	N		N	
F-14	48	先 生 ・ 警 察 民 宿 の 客	N	N	N		子 供
F-15	47	N 先 生		N	N		子 供
F-16	41	見ず知らずの人 子 供 の 担 任		N	N		子 供
F-17	41	子 供 の 担 任		上 司	N	N	
F-18	40	見ず知らずの人	N	N	N		子 供
F-19	38	見ず知らずの人	N	N	N		子 供
F-22	31	見ず知らずの人	上 司	N	N	N	子 供
F-26	26	役 職 者	近所の年寄り	N	N		め い
F-28	22	民 宿 の 客		N	N		妹
F-29	18	校 長 先 生	担 任 の 先 生	N	N		
F-30	17	民 宿 の 客	男 性 の 友 人	N	N	N	弟
F-31	16	見ず知らずの人		担 任 の 先 生	N	N	妹
F-32	15	見ず知らずの人	先 生	N	N	N	弟

図1 場面別にみた人物の出現率 (本文p.90)

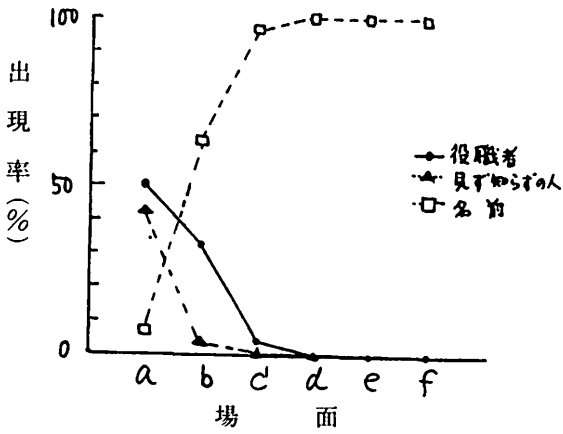


図3 場面別にみた人物の出現率(男女別)

(本文p.92)

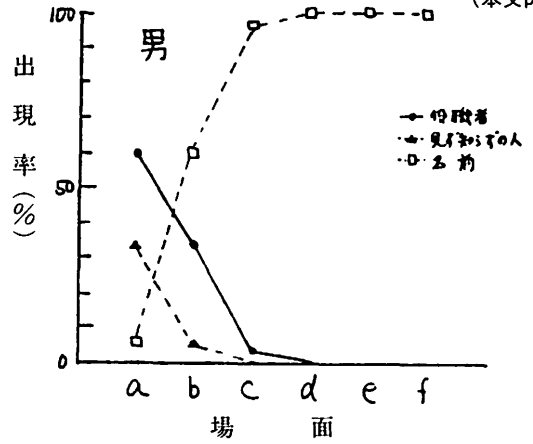


図2 場面による年齢差の平均 (本文p.92)

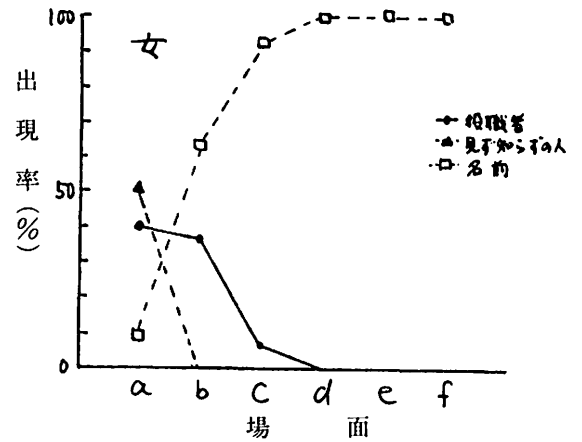
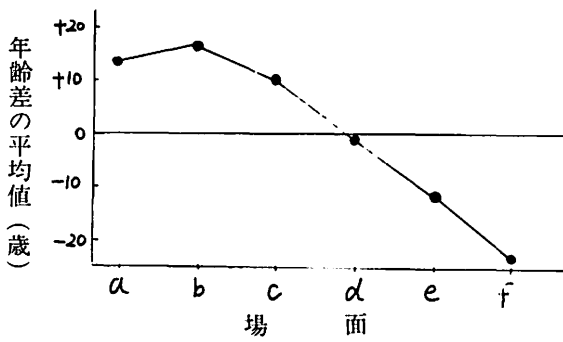


図4 場面による年齢差の平均 (男女別)

(本文p.92)

